

要旨

博物館資料の公開・活用と維持・保存と両立させるためには科学的に資料の状態、特性及び保存環境に関する知識を備え、個々の資料に応じた取り扱いや専門的な管理施策が必要となる。この役割を果たすために学芸員が日々苦勞しているほか、東京文化財研究所、奈良文化財研究所や大学などが保存科学・技術を研究しており、博物館の第一線で保存上諸問題の解決策を探るために機能している。博物館資料保存論は博物館における資料保存及びその保存環境を科学的に捉える学問で、学芸員の資格認定に規定された科目である。そして保存は博物館の基本の活動の一つであり、その他の博物館活動の基礎とも言える。博物館資料を生み出された源により大まかに分類すると、人類の文化的な活動のより創り出した人文系資料と自然界の天然のモノによる形成した自然史資料に二つの種類に分けることができる。人文系資料の保存・保護を担保する各研究機関のほか、人文系資料の中で価値の高いものである文化財を保存し、かつその活用を図る文化財保護法がある。しかし、それに対して自然史資料を保存活動の担保となる機関・組織が少なく、法律もほとんど自然史資料に機能していない現状である。

博物館資料の保存の中で、照明は一つ劣化要因である。博物館において作品の保護、鑑賞の快適性、空間の快適性の機能を満足することは基本的な目的である。しかし、資料の保護、鑑賞の快適性、空間の快適性の機能 3 つの側面はそれぞれお互いに矛盾していることが多い。とりわけ自然光に近い光源で美術作品・文化財の本来の色合いや材質の質感の観賞性及び光演出効果を保証すると同時に、光による展示品への損傷を最大限に抑えることが難点である。例えば資料を保護するために比較的暗に空間照明を保たなければならず、空間照明の快適性を保証するために人の目に優しい色の光源を設置すれば、豊かな色を持つ資料もしくは特殊材質の資料の鑑賞に妨げることになるかもしれない。

本研究では、博物館資料の保存環境における照明という要素を取り上げ、博物館に求められている照明の要件を整理し、博物館資料の光による劣化の研究を整理し、さらに実際に空白である自然史資料の光劣化実験を行った上で、今後自然史資料保存の研究のあり方について提言することを目的とする。

第 1 章は研究の背景や目的、意義、方法、用語定義などについて記述する。第 2 章は日本の照明学会から始め、国内外の博物館照明に関する研究をまとめ、博物館における LED 導入事例を紹介する。第 3 章は光劣化現象を紹介し、博物館資料の変退色に関する先行研究の整理を行い、保存科学研究上人文系資料と自然史資料の差を紹介する。第 4 章は人文系資料と自然史資料の間に見られる格差の原因を分析し、自然史資料研究の現状を把握し、今後の進み方を提言する。第 5 章は本研究で行った実験と結果を紹介する。第 6 章は聞き取り調査で把握した情報を整理し、照明を含む自然史資料の保存科学研究のあり方について論じる。終章は本研究全体のまとめを行う。